

今回の話は、表題に、「比良」と入れながらも、ほんとうに行った山は、「峰床」である。この書き出しで先週書きました。どうしても、もう一度行きたい、道を確認したいという思いで、6日経った今日、行ってきました。

朝5:30車を走らせた。「夜のとばり」なんていうけれど、「戸を張るのかな」なんてつぶやいていたが、とばりは「帳・帷」と書き、布帛（ふはく＝垂れ幕）のことである。明るくなりかけたのは6時ころだった。

6:45坊村の駐車場にやってきた。すでに10台ぐらいの車が止まっている、車中泊の方もいるようだ。登山の用意をしている数人、もう人のいない静かな車、みなさん武奈ヶ岳に行くのだろうか。道中、ナビを入れると、「京都市内を通過して大原に抜けろ」という。先日の山田さんの指示通りだ。1時間半でやってきた。

前より10分ほど早い時間に出発、前回は登山口のあたりから陽が照り、木々が、草や葉が、キラキラしていたが、今日は曇り空、ヒヤリと冷気を感じる。樹の葉や枝ごしに地面にやってくる陽の影がキラキラではなく、ぼんやりと見える。「ひとりだ 今日 寂しいけど 熊さん用のベルを 吊るさなければ」

一時間ばかりで、「ブナ平」に着きひと休み。この山はなだらかに広い尾根道、ゆったりまったりの上り下り、植林もあるが、照葉樹林帯もおおい。ブナが多いわけではなく、大きなモミ、幾種類かの樹々が生えている。

「ゲーゲー 鳥の鳴き声」で検索してもおいそれとは出てこない。安威川でよく見かけるサギ君の、「ぎゃ〜」という声もあの姿からは驚きだが、ゲーゲーはどんな姿の鳥なのかわからないが会ってみたいねえ。

35分で鎌倉山山頂の標識がある。穏やか、空気が冷たい、真っ青ではないが薄曇り、だれもいない。

まもなくオグロ峠だろう。また迷ってしまったと苦笑。赤いひもを10本ほど持ってきたがこれじゃ足りない、次回はテープだ。右下に村が見える、5軒ぐらいの家が見える。黄いろい葉が多い、赤い葉はまばらだ。今年の紅葉はよくないね、夏が暑すぎたからじゃないのかな。

10:30オグロ峠に到着。また迷った。ここは似たようなポコリンの連続、どちらにも進めるような感じの所がたくさんある。「おかしいと思ったら すぐ引き返す」これが極意だねえ、と苦笑。

11時前に峰床山頂上、峠に回り込んで飯にしようとパンを食って水を飲んですぐに出発。男二人づれがやってきた。湿原ではじいさんが大型ワインボトル大の望遠レンズで鳥撮影中らしいが、派手なベルを鳴らしてオレが近づいたのでカメラを降ろおろしていた。知らぬこととはいえ失礼しました。

地藏さんの前でおにぎりとおかずを食った。地藏さん、顔がないのか見えないのか、赤いベベちゃん着ている。12時に出発、一時間足らずで鎌倉山に戻ってきた。復路のほうが時間かかったかな。この山、人はいない、ポコリンが面白い、樹々がきれい、また来たいねえ、いいところだ。

ブナ平らでひと休み、急ぎすぎた、もう少し休憩を多く取ればよかった、なんだか疲れてきた、といいながらすぐに出発。「おお 疲れた」登山口に着いた、お宮さんの流れで口を漱ぎ、水を汲み、タオルを浸し、車へ戻った。靴を脱ぎ、タオルで体をふき、シャツを着替え、2:30にエンジンをかけた。京都市内は中ほどまでスイスイ走れたが、中心部が異常な人出、帰って調べると、北大路から西大路というルートを取るべきだったかなと。

民衆史の遺産：鬼。またこの本を借りてきて読んでいます。

谷川健一

本居宣長が、「古事記伝」の中で下した神の定義は有名である。そこで述べられた宣長の考えの特色は、高貴なるもの、善なるものだけを神と呼ばず、いやしいもの、悪いもの、あやしいものも神とするところにある。「悪しきもの奇（あや）しきものなども、よにすぐれたて可畏（おかし）きをば、神と云なり」

人の中の神はまず天皇、ひとつの国、ひとつの村、ひとつの家、にも神たるべき人がいる。

人でないもの、すぐれてあやしい物、可畏いものにも神という名がつけられる。雷は鳴る神、天狗・木霊も神である。狐、妖怪、変化の類も神である。疫病、害虫、悪い風も宣長の神の定義に含めることができる。

宣長の、「可畏き」ものは、他者を侵害する邪悪な能力をもつもの。日本書紀では、ヤマタノオロチを、「可畏き神」、狼を「貴（かしこ）き神」、虎を、「威（かしこ）き神」と呼んでいる。

獯猛なシャチは、アイヌの最も畏敬する神。三浦半島の漁師はシャチを忌み言葉で、「王様」と呼ぶ。

出雲の国造神賀詞（いづものくにのみやつこのかんよごと）

豊葦原の水穂の国は、昼は五月蠅（さばえ）なす水沸き、夜は火瓮（ほべ 火を焚く瓶）なす輝く神あり、岩根、木立、青水沫（あおみなわ）も事問ひて荒ぶる国あり。

何もかもが不平を鳴らし、あやしき神、荒ぶる神が横行した。異形の者たちが登場し、目もあやに繰り広げられる闇の絵巻は、もとより古代人の想像力に属するもの。そこに跳梁跋扈するモノを古代日本はときには、カミともモノとも呼んでいた。

カミは、「可畏きもの」で、相手を侵害する力をもつものを指す。それは神が妖怪としておそれられる存在であった。人は自分たちに恩恵を与える善の神を信じるはるか以前に、神とも妖怪とも祖霊ともつかない、三者が一つに溶け合ったような存在を畏敬の対象とする時代を長く過ごしてきた。

神賀詞（かんよごと）当時各地方の国造（くにのみやつこ：知事のようなものらしい）が、朝廷に対して奉った文章らしい。出雲の国造神賀詞は長い文章ながら、この話はまた後日、があるかな。

神、信ずるもの、自身の絶対支配者、考えてみるとオレにはそのようなものはない。心底託せる、信じられる、と考えるとなかなか出てこない。欧米の現代劇の中には、一神教の神々をそれぞれ信じている人たちが多数いるようだ。「本当に信じているの」と聞くのはばかられる真摯な方々もおられる。アニミズムという言葉、二百年前にヨーロッパで起こった言葉、それよりもっと昔に、「八百万の神」の存在があった。

かみさま ほとけさま どうぞ お助けを こんなことをいったことが 何度かあるよねえ。

かみさま ほとけさま、の中には、風や雲、石ころや葉っぱ、虫やキノコまで含まれる。

オレねえ、山に入って大きな朽ち木を見ると、「ごくろうさんでした」といいたくなるよねえ。

物だけじゃないよね、ぞくっとする悪寒、ほわっとする喜び、こんなものもあるよねえ。

宝くじ、これが当たれば、大きな神だろうね。

交通事故、これが当たれば、大きな厄神だろうね。病気もだねえ。

がはは、人とはかってなものだ。

民衆史の遺産 馬場あき子著<鬼の研究>

先生:鬼の原像追求の中に民俗学の一分野を見ることは、今日ではすでに常識となったことであるが、これに対して、日本の鬼が土俗的束縛を脱し、その哲学を付与されたのは、中世において鬼女<般若>が創造されたことをもってはじめとしてよい。

般若とは能の鬼女で、それは中世の鬼の中でももっとも鬼らしい鬼である。なぜなら三従の美德に生きるはずの中世の女が、鬼となるということのなかに、もっとも弱く、もっとも複雑に屈折せざるを得なかった時代の心や、苦悶の表情を読み取ることができるからである。般若の面は、そうした鬱屈した内面が破滅に向かう相を形象化して、決定的な成功を収めたものといえる。時代を代表する文学なり、芸術なりは、おおくそうした尖鋭な脆さや傷つきやすさの面に作品を生みやすいものだが般若の面はそうした意味でも中世破滅型の心情を伝える絶品であり、謡曲という、やや文飾に溺れた文学から、鬼女変貌の心を直截につかみだして来た感がある。

ネットで般若と検索するも、般若という歌手のコメントがほとんどで、肝心の今の話の般若のことは出てこない。仏教用語としては、「知恵」「悟り」という言葉だそうで、般若心教というお経も有名だが、オレ様、内容に関してはまったくの無知である。もう一つ無知を曝けると、般若の面は男面だと思っていた、男の憤怒の形相、角があるので、「鬼め 鬼畜め」と恐れられ、罵られる存在かと思っていた。小面という優しい初々しい女面が、裏切り、嫉妬、憤怒の末の形相だとは知らなかった。いまあらためて、般若の面だけを並べて見るも、どうも男におもえる。先生のように能に精通し、謡曲を味わい舞を味わう人には、般若の面が、「破滅型の心情を伝える絶品」と言えるのかもしれないが、オレにはどうもいまだに、男面としか見えない、という文化度の低さかな。

世阿弥は鬼の能にふれて、「形は鬼なれども 心は人なるがゆへに」という一風を想定している。私が鬼と呼ばれるものの無残について述べようと思うのも、このような人間的な心を捨てかねて持つ鬼に対する心よせからである。<略>中世の鬼女がきわめて独自であるのは、たとえば能の詞章が、鬼とならざるを得なかった女の内面に綿々としてかわり、あるいは鬼となってからさえ、その渋滞しやまぬ情念のゆくえを問い続けていることである。美しい七五調と花鳥故事に粉飾されたその詞章が、悲哀の極致の凄惨さを見せる般若の面と照応するとき、出口なしの中世の心が、まさに女の姿を借りて哀切な叫びをあげているかと思われる。

鬼とはなにか。それこそ王朝繁栄の暗黒部に生きた人々であり、反体制的破滅者ともいうべき人々であった。説話の世界にあふれる庶民的エネルギーはとりもなおさず、破滅しつつ現実を生き抜いた鬼どもをささえたポテンシャル（潜在能力）であったといえる。王朝期とは、このような人間的、土俗的、仏教的、鬼とが混然と同居した時代であり、数限りない妖怪譚と呪術合戦を生む時代であった。鬼そのものの出現はやや非現実のかなたのものとなり、「狂言」や、「御伽草子」の鬼は、どこかまぬけたユーモラスがともなっている。過去の時代に跳梁跋扈し、またつぎつぎ消滅、誅戮の運命に服した鬼どもへの深甚なる哀悼追慕の挽歌であったといえる。

そうだねえ、なんだかわけのわからないこと、そういう良くないことが次々と起こると、「なんだかおかしい これは普通じゃない 何かの力が動いているのでは」と思う。まして、千年も以上前、科学も理屈もない時代、「これはおかしい」と思えば、「鬼だ バケモノだ 妖怪だ 靈魂だ」と大騒ぎをしたくなるのも当然だろうね。しかし、オレにとって、「鬼」の存在は、「神」の存在と同じぐらいに気持ちが騒ぐ。靈魂だ、魂だ、と言ってもなんだかぴんと来ないが、そういうあらゆるものの親分として、総称して、オレの中で鬼であるというのがいいのかもしれない。「中世は 暗黒の時代であった」というとりとめもない疑問から、行きついたところがこの鬼なのかもしれない。鬼というケタイなものの総称としてみていきたい。

時の経つのは早い、という常套句が似合う今日この頃、そういう歳なんだけれど、夏過ぎころまでは時間が進まなかった。別段何かがあるとか、気にかかることがあるとか、そういうことはなかったけれど、どこかで誰かがブレーキを軽く踏んでいるというように、なにかがささくれだちそこをゆっくり進むというように、その時はきが付かなかつたが時間がゆっくりと流れた。ところが今振り返ると、なんと11月の中旬を越しているではないかと、とこれははなはだ言い回しがわざとらしいが、ちょっと驚いている。

わがアトリエに、四人の方が絵を描きに来られている。木曜日の三四時間描いて帰られる。前日は便所掃除から始まって、掃除機とコロコロを回してきれいにしている。人が来るから掃除もするし片付けもする、これはいいことだとしておこう。四人の方はそれぞれ、油絵やら水彩画やらで、50号ぐらいの絵を描いている。大きな絵を広げるとアトリエもいっぱいになる。そんなみなさんの油絵を見つつ触れつつ、なんだか自分も描きたくなった。新しいキャンバスを探し出し、フタが堅くなった絵具のチューブを温め、パレットに油絵具を出し、描きだした。作品を作ろうというのではなく油の感触を楽しもう、ドロイングがいい、オレ流に言えば、「かる〜く 描くラクガキ」でいい、と進めながら、「いい絵が 描きたいねえ」と欲が出てくるのは、苦笑である。

油絵を描きだして、「あれれ 違うねえ アクリルと」と驚いている。永らく油をやってきたので絵の具が変わったところで絵は変わらないとしていた。油絵具とアクリル絵の具では、少しずつどこかが違う。描き味が、発色が、感触が、少しずつ違う、「こんなものだったか・・・」とこれまた苦笑である。些細な違いをあげつらっても仕方がないが、たくさんの絵かきが油絵具で奮闘してきた様々は目に浮かぶ。油絵具の怖いところには、亀裂やら剥離がある。十年ぐらい経つと、細かいヒビ割れが生じ情けない思いをしている仲間の顔が浮かぶ、まして10〜20センチぐらいの面積でパラリの絵の具が剥がれ、白いキャンバスが露呈している仲間の絵も見たことがある。「なんとか 直しますよ」と蒼白の彼を見て、「直るわけが ないだろう」とつぶやいた。油絵具はそういう事故が付きもの、絵具の重ね方、塗り方、これらを間違えるとこういうことになるが、夢中になって描きこんでいるとそういう順序が飛んでしまって、忘れてしまって、「さあ出来上がった」十年の歳月で絵が潰れる事故にあう。でてきたオレの小さい絵も、「お いい油絵を 描いて たな」見ると亀裂が入っている。

今日は山に行っているはずの日、今頃は高速道路から降りて信州の地を踏みそうな時間、この三日間が今年最後の信州だと思っていたが、天気予報が70〜80%の降水確率で全国的に荒れ模様という。この天気では無理だと中止した。今朝も天気予報で、大阪も午後から雨模様、しかも全国的に荒れ模様で突然の豪雨や雷に注意と報じていた、午後から雨とので午前中の今、河原にやってきた。昼前の今、ぼんやり陽も照り、暖かい。おひさまの温かさ、昨日も着ていた防寒具を脱ぎたくなる陽気、背中から汗がにじんでくる。

自転車をいつもの場所に止め、走り出した。安威川の浚渫工事、大型の重機が水の中に入り中州に積もった土をどんどん運び出している。これをすることで大型の水害が防げるのだと説明書きに書いてある。その工事の間、河川敷は通行止めで人は河川敷に入れない。ちょうどうまいところに、土手の外側に太い道路があって、ガードレールが長く続く。その内側は人がほとんど通らないのでいつもそこを走っている。外側には大型のトラックが行き来する。中央市場やトラックターミナルに出入りする大型トラックたち、100キロや1000キロを走っていくのだろう。2時間も走ると森林地帯が、海岸線が、そして隣町の賑わいが見え、またヒソソリの村がつづくという、オレの頭はトラックの運転席の目になろうとしているのかな。

安威川の水、雨が少なく水位は低く、ゆったりと海に向かって流れている。少し上のダム工事、近くの浚渫工事、そんなこんなでうっすら濁った水が、ドロリ、たゆたゆ、流れ、鳥が止まっている。

◎東吉野に向かっている。ガソリンを入れるために車の外に出ると風がヒヤリ冷たい。ぞくりとする冷たさ、冬だねえと運転席に戻った。南に向かっている、「ひんがしの・・・」あとはなんと続くのかな、向こうのほうに青いグレーの山並み、雲は黒く白く、その隙間に太陽が顔を見せたり隠れたりのもり空ながら、ダイナミックな光が散っている、「かげろひ」はあのあたりのことかなあ。同道は相澤・前川様様だ。東吉野村に向かうのは久しぶりだと調べると、半年前の5月に、三峰山、檜塚奥峰と続けて来ていた。

◎東吉野から飯高に抜けるトンネルが凍結していればいやだなとやってきた、凍結に注意の看板はある、凍結はしていない、路面がしっとりしている、予定通り中央構造線が見えるあたりの登山口に向かった。

◎冬の格好、二枚のシャツにセーター、防寒具、毛糸の帽子、アクリルの手袋、登り路をエッチらがんばっているが熱くはなっていない、雪こそまだないが冬の山だ。先日までシャツ一枚で山をうろうろしていたが、急に冬がやってきた、オレの身体はまだまだ冬に慣れていない、薄い毛糸の帽子では耳が痛い、そうだ、ヤッケのフードを被ればいい、またまた、エッチらだ。

◎針葉樹の植林地帯、杉か檜か、樹林帯が長々続く。そんなところが過ぎるとカエデの樹が多いところ、ほとんどが黄色く色づく、赤もある、そんな黄と赤の中に緑がある、これが何と新鮮に映るのだ、きれいな緑だ。

◎寒さに弱いオレとしては、心底、底冷えを感じるが、そんなことを言いながら、寒い季節は体調がいい、身体がふんわり生き生きしている。それに比べ暑い季節、暖かいときは、水を飲み、また水を飲み、次に茶を飲み、コーヒーを飲み、身体の中がみずみずしい分、気持ちがいい、活力が浮いている、なんて、ケタイな表現だ。

◎12時に八丁平にやってきた。「おおお いいところ きれい きもちがいい」おおはしゃぎである。このあたりだけ丸い背中、尾根広場、庭師が刈り込んだ丸いみどり、地面は一面芝生、夏はみどりで今は褐色というのか黄土色というのか。所々に葉の落ちた樹々の枝、強い風に吹かれすぎて、幹が育たず低いまま、真冬になれば白い雪やら氷やらが付き、棘のようなツララが横向きに走るのかな。もう一度、「気持ちのいい ところだ」

◎風の来ない木陰で飯を喰おう、もうちょっと下ったところがいい場所があった、そっちへ行こう。ようし、ここで飯を喰おう、弁当を広げよう、湯を沸かそう、ヌードルを喰おう、コーヒーを飲もう。しかしさむいねえ、ザックの防寒具を着こみ、ザックの弁当を出し、コンロの火をつけた。おにぎりをほうばった、オレの漬けた梅干しだ、塩を入れすぎて相当に塩辛かった。昔ながらのおばあちゃんの塩梅やね、そらあ、からいわ。あまりに塩辛くて、梅干しのうまみが消えてしまっているの、塩水につけて一晩おいた、そいつを使った梅干しだ。塩気が少なくなって美味くなっている、梅の味がする、ふりかけの味も微妙になじんでいる、美味しいじゃないか。今朝作った、野菜炒めこれも美味しい、卵焼きをお食べ、お肉をお食べ、ポテトサラダをお食べ、トマトをお食べ、美味しいねえ。

◎湯がなかなか沸かないと震えている、木陰なのに風が吹く、あれれ、これは雪、小粒の雪が舞いだした。あれれ、これはいかん、湯は下に降りてから、まずは退散、なにやかや、ザックにしまい込んで歩き出した。

◎2年前の9月に見ている、ホソバナヤマハハコという花の群落、2か月経った今でも、あの花だと思わせる枯れ方、この花があたり一面咲いていたのには、ドンなオレでも感動したね。トリカブトもそれとわかる格好で枯れている。

◎半分ぐらい降りてきた、びっくりする雪、びっくりする寒さ、ほうほうのていで逃げ帰ってきたが、今はおだやかな曇り空、冷たさに指の痛さもいまはないが、ヤッケのフードはかぶったままだ。山の中では、おひさんの照っているのが一番いい、暑いとか焼けるとかいうけれど晴れマークが一番だ。

◎2時には車のところまで帰ってきた。4時間の山行時間、これはいつもの半分の時間、登山道もしっかり整備され普通にスイスイ歩ける、急なところも十分に切り返しが付いていてゆっくり楽々登れる。黄色い葉っぱが気持ちよかった。レモンイエローの葉が一番いいねえ。

◎車に帰り、靴を履き替え、湯を沸かした。風をよけるために車の中でコンロに火をつけた、たっぷりの湯で、ヌードルを、ココアを、まんじゅうを、パンをいただいた。車中時間が往復6時間もかかってしまった。

◎不思議だ、先日までのうだるような暑さが嘘のように寒い、もう一枚なにかを着なくてはという季節になってきた。こんなことは誰もが言うことで、歳をとったものならば至極普通の表現なんだけれど、昔はこんなバカな言い回しはなかった。若いころは、夏を楽しみ、秋を楽しみ、冬を楽しみ、春を楽しんでいた。ジジイになると途中が飛んでしまうのだね、苦笑だ。

◎来年三月に開く、例年の新大阪シエスタ倶楽部の展覧会案内状ができあがってきた。載せた写真は10月に出来上がった二十号の絵を選んだ。ちょっと今までと違った画面をとともくろみ真っ白い画面の半分ぐらいに黒い絵の具を流し込んだ。思わぬ偶然なのか筆の走ったあとがもろもろに浮き出て、これは面白いと次の一手、その次の筆と描きこんでいった。実物の絵がアトリエの壁にかかっている、写真が実物と同じ色に出来上がれといつも念じているが、これがなかなかむづかしい。印刷屋から試し摺りが送られてきたのを見て、ちょっと色が違う、もう少し暗いかな、なんて考え修正をして発注した。やはりちょっと違う、なんだか違う、とは言うもののこれは想定範囲かなとあきらめた。さてこの絵、展覧会ではみなさんなんといってくれるかな。ただ残念なことに、毎年仲間が少しずつ減っていく、オレの展覧会は老人会になっていく、若者が来てほしいねえ。

◎いつものことだが、山から帰って、すぐに文章と写真の整理をすることにしている。もう何年か前から、ICレコーダーを首からぶら下げ山を歩きながらぶつくさやっている。カメラも前ポシェットに入れ気が向けばパチパチやっている。それぞれのデータをパソコンに入れ、文章を写真を整理していく。文章はブログに載せ、写真はHPに載せている。この作業が楽しく、山の翌日はこれにかかりきりになっている。「写真の青空が 上手く写らない 色が違う ぼけている くすんでいる」いつもぼやいていた。10月の山で、中西さんが、「RAW データ もってきて 現像したる」少し前の夏ごろ、「広角レンズを 買うといい」と言われ10~20ミリという超広角を手に入れた。「10 だけで撮るように」「えらいうまくなった いいぞう」と励まされたくさん撮るようにしている。RAW 原像は、photoshop を使ってやっている。この項目、このボタンを押し、そこをちょっとスライス、てな感じて1分もさわっているとがらりと違った写真になってくる。中西さんから戻ってきた写真、「これが ほんまにオレの写真 かいな」と驚くような画面になっていた。見た時は、「えらく ケバイ」と感じたが、プロの写真家はみなさんこんな感じ、これが現像かと感心した。家に帰ってオレ自身のphotoshopを開けてみるが、バージョンの違いから画面が相当違っている。パソコン本体を担いで中西スタジオに行こうかと思ったが、画面をそれぞれ写し取って送信してみた。早速電話がかかってきて、「このボタンを右に左に これとこれは 触るな」なんて教えを受け、青空が再現できるようになった。いずれにしても中西さんのマックの画面はきれい、娘の旦那が持っているゲーム用の画面もきれい。「グラフィックカードと モニターの差」だと教わった。

◎アトリエの作業、絵を描くだけではなく、絵を描く前にいろいろな作業がある。「こんな作業は さっさと 終わらせて 描きたいよね」と思う反面、「絵だから これぐらいですむ ほかの仕事なら ほとんどの時間が 雑用では ないのかな」と知らされる。陶芸も、形を作る、釉薬をかける、絵付けをする、これらの作業が作陶だとしたら、それ以外の時間が結構多い。土造り、窯入れ作業、窯焚き、雑用だらけだ。江戸時代、浮世絵の版画は、それぞれの雑用を分業化して、描きや、彫や、摺りや、それぞれが分業していた。話は飛んだがぼやきたいのは、パネルを作り、布を張って、下地材を塗って、もう一回塗って、さあ描き始める。終われば絵の写真を撮って、キャンバスを剥がし、またまた次の作業だ。てな風にぼやいているがこれまた楽しだ。

◎封筒に一万二千円も入っている、おおこれはうれしい、絵の授業料だそう。下さいとは言っていないがただける、お布施の心境、「ありがとう」良寛さんは余分には要らない、というが、オレはそれはない、いやいや、欲ボケしてはいけない、反省。